

島小の教育実践 —学校行事—

狩野浩二（学校教育・教育学）
（2003年10月21日 受理）

Educational Practice at Shima Elementary School, Gunma Prefecture
: Focusing on School Events

KARINO Kouji

1. 学校行事の再検討
 - 1) 学校行事の形式化
 - 2) 学校行事の更新
 - 3) 運動としての島小実践と表現活動の充実
 - 4) 事実に対応した教師の要求
2. 何をよいとするか
 - 1) 教育評価における指標としての“美しさ”
 - 2) 児童の内面的な充実と表現
 - 3) 島小本校と分校との関係
3. 卒業式の創造
 - 1) 卒業式と子どもの表現活動
 - 2) 卒業式の発展
 - 3) 学習的経験を総括する卒業式
4. 入学式の展開
 - 1) 入学式の創造—保育園とのつながり
 - 2) 入学式の台本
 - 3) 新入生の変容

概 要

斎藤喜博(1911-1981)は、1952(昭和27)年4月群馬県佐波郡島村立島小学校に校長として赴任した。斎藤は、着任してから、かたく心を閉ざし、勉強にも日常生活にも消極的であった児童や教師たちの雰囲気を変えることに力を尽くした。そのために、原因となっているあらゆる慣行を廃止した。たとえば、斎藤が赴任した当初の学芸会は、特定の児童を訓練して、それぞれの特技を発表するというものであった。運動や音楽、舞踊などを得意とする特定の児童が幅をきかせ、それ以外の児童はもっぱら傍観的に参加していた。

そして、それらは日常的に行なわれる授業とはまったく無関係に行なわれていた。当時は「授業」自体が旧来の教え込み型、講談調のものであり、そもそも、それらと学校行事とをつなぐという発想自体がなかったといえる。後には、島小の全児童が、集団で児童による表現活動を主体とした学校行事の創造に取り組み、心をひらいて自分の実感を表現するように変わっていったが、斎藤赴任当初は、まったくその反対であった。そのため、児童の中に嫉妬や抑圧、諦観が渦巻いていた。級友が活躍する場合においても、無関心であり、また、できればできるだけ目立たないようにふるまうことがよしとされていたといえてよい。

そこで、島小においては、このような形式的な「学校行事」を一時的に取りやめた。そのなかで入学式や卒業式に、児童による“呼びかけ”を取り入れたり、“構成遊技”といわれる、後の“総合表現”や“オペレッタ”などの身体表現活動につながる新たな学校行事を創造した。

キーワード：教授学、表現活動、集中、斎藤喜博、みえる

1. 学校行事の再検討

1) 学校行事の形式化

斎藤喜博(1911-1981)は、1952(昭和27)年4月に群馬県佐波郡島村立島小学校(以下、島小と略記)に赴任すると、島小児童や同校の教師たち、保護者など、この学校に関わる人たちのコンプレックスや封建的な意識など閉じた心をひらく作業に取りかかった*1。その仕事の中で島小の学校行事を改革する作業に取りかかることになる。

斎藤は、群馬県教職員組合文化部長を経、1952(昭和27)年4月に校長として島小に赴任してから7年目に著した『学校づくりの記』に、当時の状況を次のように報告している。斎藤は、教師たちの取り組みが形式化してしまい、集団のよさを生かす学校教育の特質とは無関係に行われるようになっていた学芸会を職場の話し合いの中で中止と決定し、それを内外に公表した。斎藤は、『学校づくりの記』の中でいう。

この学校（群馬県島小学校—筆者）では私（斎藤喜博のこと—筆者）がいくまでは、毎年三学期ににぎやかな学芸会をやっていた。だがこの学芸会ははでなもので、よい家の子だけが出場して、一般の子どもは参加できないようなものであったらしい。…（略）…先生たちが勢力のある家庭に迎合して、学芸会にそういう家の子どもばかり選んで出場させたということは考えられる。その学芸会の内容も振袖を着て、お白粉をつけておどるようなものだったらしい。子どもたちもそういうものを好んでいたにちがいない。そういうものではいけないのだが、まだそれにかわる新しいものも生まれてこない。それで学校では、今年は学芸会は中止しようということにした。…（略）…「どうして学芸会をしないのか説明してほしい」という意見が出たので私は、「この村の子どもは、この間の参観日にお話したように、いじけていて気が弱くて雑です。少しも子どもらしく生き生きしたところがありません。今はそれをほぐそうと努力しています。この仕事がすすめば今までとちがった学芸会ができますが、今ではまだ、今までと同じ型のものになってしまいます。子どもたちも学芸会をやりたがっていますが、それは長袖の着物を着て、おどったり劇をしたりしたいのです。今に力がつけば、そういうものでなく、みんなの力でつくり出した生き生きとした学芸会ができます。それまで、一時やめたいのです」と、少し長々と説明した。「校長さんがそういうのなら」ということで、その話は終わりになってしまった…（略）…*2（下線—筆者、以下、下線はすべて筆者によるものである）

斎藤が赴任した当時の島村は、養蚕業の成功で一部の特権階級が生じ、村の行政や経済、流通などに対して一定の影響を持つ者たちが存在していた。それは、学校の内外に対してさまざまな影響を与えていたのであり、ここに記録された学芸会は、その一つの現われであった。

学芸会を一時的に中止し、将来は「みんなの力でつくり出した生き生きとした学芸会」（同前資料）をつくりあげようという内容を学校外に公表するにあたって、斎藤は、自分の提案であるということを強調した。学芸会の中止は、職員会議で決定したことではあったが、しかし、職場や島小をとりまく地域全体に、まだまだ過去の封建的な空気が残っており、教師たちが学校外からの批判にさらされれば、再び教師たちは心を閉ざし、創造的な学校づくりの障害になると斎藤は考えていた*3。

この時期においては、ほんの小さな出来事であったとしても、それは、島小の児童や教師たちに大きな影響を与えていた。子どもや教師が自信を持って島小での教育の仕事に打ち込めるよう、斎藤は最大限に配慮していた。

元島小教師のひとり、島小時代を回想して、校長である斎藤があらゆる外部からの批判などの影響力をひとりで背負い、島小を代表して闘っていたが、しかし、そうした斎藤の苦闘の実態を知ったのは、かなり後になってのことであり、当時は、まったくそうしたことが分からなかったという*4。

島小教師たちの心をひらいて、教師本来の仕事である授業や学校行事の取り組みに、教師たちが集中できるように、斎藤は校長として努めていた。授業や学校行事などのだじな教育活動に負の影響を与えるような、外部からくる要請や批判に対して、教師たちの心の負荷にならないような形で、斎藤はそれらを遠ざけていた。

学芸会を一時的に中止するにあたって斎藤が細心の注意を払って校長の考えであるとわざわざ補足している背景には、こうした当時の状況があった。

2) 学校行事の更新

このことは、入学式など島小において取り組まれていた他の学校行事において、同様に考えられていた。

斎藤は、その取り組みが形式的になり、子どもを抑圧したり、萎縮させたりするようになっていく学校行事は、職場での話し合いの中でその内容を改めるようにした*⁵。このことは、学校行事に関する取り組みだけではなく、学級づくりや教師の研修、授業の研究など、島小における教育実践のすべてに対して徹底していたのであり、斎藤の学校づくりにおける原則の一つであるといえてよい。

斎藤が島小に校長として在職した(1952年4月-1963年3月)最終年度の11月から翌年の4月頃まで執筆した『教育の演出』のなかで、赴任した頃に行なわれていた卒業式の内容を、彼は記録している。

…(略)…昭和二十八年三月の卒業式は、普通の卒業式で、ただ『仰げば尊し』をうたわなかったり、卒業証書を一人ひとりに渡しただけだった。その翌年…(略)…盲腸の手術で入院中だったので、卒業式に出ることはできなかった。／島小の卒業式が新しい形になっていったのは、その翌年の昭和三十年三月の、私が赴任して三年目の卒業式からだ。それ以降、島小の卒業式は、現在までに大きく三回の変わり方をしている。すなわち、第一期は、昭和三十年三月からはじまった「呼びかけ」的なものであり、第二期は、昭和三十四年三月の卒業式からはじまった。どちらかといえば、演劇と音楽の会をかねたような卒業式であり、第三期は、昭和三十七年三月からはじまった、たぶん抽象的な、そして内面的な卒業式である。*⁶

ここで斎藤がその内容を総括しているように、斎藤喜博が島小に赴任して四年目、1955(昭和30)年には、卒業式の形式が大きくかわっていった。

この年は、島小で第一回目の公開研究会が行なわれた年であり、斎藤赴任以前から島小の教師として在職し、どちらかといえば島小の学校づくりにとって負の影響力となっていた職員が少しずつ退職や異動などによって少なくなり、その後の島小教育実践を支えていく教師がほぼそろった時期である。また、運動会の形式が変化し、校庭を使って行なわれた児童集団による演劇的表現であっ

た「野外劇」や「構成遊技」、「コマ」など、児童による身体表現活動の中核とする取り組みになっていく時期であった*7。

3) 運動としての島小実践と表現活動の充実

島小では、先述の通り、斎藤が島小に赴任した当初から、地域のおとなたちや児童の保護者、児童、教師など島小をとりまく人々の心の固さ—例えば、それは、既成概念にとらわれた認識や封建的な雰囲気などであったが—それらを取り除く努力をした。その仕事がほぼ完成し、全国から学校に参観者が集まるようになり、島小の教育実践自体がひとつの教育運動として展開していく出発点が1955（昭和30）年であった。斎藤が島小に赴任してから丸3年の時間が経過していた時期である。斎藤がいうように、いわば、島小が“島村の学校”から“日本の島小”へと転換していく第一歩を刻んだ時期であった。

金子緯一郎は、斎藤赴任の翌年に世良田小（現、尾島町立世良田小学校）から島小に赴任してきた教師である。赴任した当時は30歳であり、船戸咲子や赤坂里子などこの後に島小を背負っていく若手女教師より年長であった。

金子は後に『島小十一年史』を麦書房から刊行するなど、同校の記録を細密に残していたが、その金子が当時島小で編集発行されていた謄写版刷りの「島小研究報告」第8集、1955（昭和30）11月10日発行に当時（1954年頃）の卒業式の内容を変更する話し合いを職員で行なったことを記録した。金子は、同報告の中でいう。

また卒業式のやり方も私達は考えた。そこで式も思い切って昔の型を捨て、今年は呼びかけ式にやった。／まずピアノの伴奏につれて六年生が着席しおわると／女先生「さあ、これから卒業式をはじめましょう」／在校生「茂木先生、今年の卒業式（卒業生の意か—筆者）、幾人ですか」／茂木「今年の卒業生はね……」／という具合に式がはじめられる…（略）…*8

この記録と同様の事実を斎藤は1963（昭和38）年にまとめた『教育の演出』のなかで指摘している。

島小の教師たちは、大量の著作物を残している。そのなかで島小最初の実践記録『未来につながる学力』1958年（斎藤喜博編）、つづいて斎藤喜博執筆の『学校づくりの記』1958年、『島小物語』1964年の3冊では、同時代の関係者に配慮していくつかの事実を入れ換えたり、登場する人物を仮名で描いたり和不確かな部分がある。こうした配慮は、これらの刊行物が出た当時において、関係者への影響を考えればやむを得ないことである。今後、事実関係の異同に関して島小文献を読み取る際に注意しなければならない点であるが、しかし、複数の学校資料を照らし合わせていくことによって、島小教育実践の事実を再構成することが可能であり、この記録はそれが可能であるという

ことの証左である。

斎藤喜博は、初期の島小実践をふりかえって、次のようにいう。

… (略) …初期のころ、卒業式を呼びかけ形式にし、卒業証書も代表に一括して渡すのでなく、一人ひとりに渡すようにした。このときも、外部からの非難があったが、その後、この形式はずいぶんたくさんさんの学校で行なわれるようになった。一人ひとりに卒業証書を渡すことなどは、いまでは、どこの学校でもあたりまえのことのようになってしまった。／群馬県では、小学校の卒業式は、三月三十日だった。だが私は、三月二十九日に卒業式をするようにした。それは、三月三十日からは、県全体が学年末の休業日になっていたので、休業日でない授業日に卒業式をしようとしたのだった。卒業式は、授業と同じだから、授業日にするのが当然だと思ったからだ。… (略) …これらの場合は、他の学校へ影響を与えようとして演出したのでも、計画をしたのでも、運動をしたのでもなかったが、結果的には演出的な効果を出したのだった。そしてこのことが、島小の先生たちにも、現実を変革していくことへの意欲と自信とを持たせたのだった。実践することが、内外への結果的演出になったのだった。^{*9}

斎藤は、先述したように島小の教職員からさまざまな雑務を取り除き、授業や学校行事を充実させる教師本来の大事な仕事に、教師たちが打ち込めるように配慮していた。同じようにして、島小の児童たちが学習活動に思う存分取り組めるようにすることを第一に斎藤は、考えていたのであり、卒業式や入学式の日程やその取り組みの中身に関して児童の学習を大事にするという原則に沿うよう変更した。

学校行事の実施にあたって、今日では授業時数の確保のために行事の内容を削ったり、簡素化したりする傾向にある。このことは学校五日制が導入されたり、総合的な学習の時間が特設されたりし、教科目毎の授業時間が減ったことでより強まってきた。

島小においては、学校行事を授業と同様に考えていた。さらにまた授業での成果を発揮し、集団での表現を勉強する場が学校行事であり、日常における児童の学習活動を発展させ、充実させる上で大きな意味をもつと、その実践の中で認識するようになっていた。

したがって、後述するように、学校行事の計画や実施にあたっては、児童の学習を大事にするという意味において必要なものを取り入れ、不必要なものは惜しげもなく排除していった。

4) 事実に対応した教師の要求

筆者は、近年、元島小教師の川嶋環氏とともにいくつかの小学校で共同研究をすすめる機会を得ている^{*10}。川嶋氏は、斎藤赴任から五年目の年、1956（昭和31）年に群馬大学学芸学部を卒業し、希望して島小に赴任した教師であり、また、その後も一貫して教授学研究会に関わってきた。そ

の点で、いわゆる初期の実践（1952～55年）後の、島小の実践のなかで、身をもってその学校づくりや授業づくりを経験してきているのであり、この限りにおいて川嶋氏の実践上の原理や原則は島小において形成されたとみてよい。

共同実践、研究の場で川嶋氏がもっとも心を砕くのは、学級の子どもの状態に対応して、教師から要求を出していくということである。たとえば、初めて出会う子どもであれば、その子たちがどの程度表現することになっているか、計算に習熟しているか、抽象的な概念を理解するかということの診断に時間をかける。そして、その結果によって、用意していた教材や教材解釈を一切捨ててしまったり、その反対に、事前に用意したものに加えて、さらに発展的な教材や課題をとっさにつけ加えたりする。

こうしたことは、授業で出会う子どもが初対面だから行なわれるというのではない。学級の子どもがあらかじめ持っている知識や技能、その時の子どもの心的構え、潜在的な能力などをふまえて、それを存分に開花させ、伸ばしていくという発想を授業者がもっているからである。

これはいわば、授業における教育目標は、あらかじめ想定しておくとはいえず、子どもと対面した後、子どもの状態に対応してつくられるのであり、あらかじめ固定的につくっておけば、それですべてがうまくいくというものではないということである。

こうした点が一般的な教育目標論や授業論と異なるところであり、島小の教育実践の特長であるといってよい。

授業に臨む子どもの実態を把握し、教室の状況をリアルに認識する作業によって、子どもの既成概念や既有知識、発想などに即座に授業者が対応し、子どもに新たな学習対象を示すなどの要求を出していくことが可能となる。

さらに島小の教師たちは、同時代における島小児童の保護者に関心を寄せ、その実態の内実に合わせて、学校行事をつくりあげていた。行事で取り組む内容が、通俗的であったり、形式化したものであったりしても、この段階では必要であると判断した内容は、あえて残した。

斎藤が区分した島小における教育実践の時期でいう、第一期〈斎藤赴任の1952年から1955年頃まで〉に取り組まれた学校行事の内容は、当時の島小をとりまく地域や学校の実態に合わせて、斎藤が島小に赴任するより前から学校に存在し、伝統的に行なわれていた古い内容を残した。斎藤は島小における表現活動の指導についてまとめた自著『教育の演出』のなかで、このことを次のように回想している。

…（略）…右の二つの卒業式台本（この前にシナリオが掲げられている—筆者）は、台本としてつくり、プリントして、それをもとにして何回かの練習をして卒業式にのぞんだのだから、実際はこれといくらがちがっているところもある。練習をし、演出をしているうちに、変えら

れるところも出たのだが、いまははじめの台本しか手もとにないのでそれをのせた。この「呼びかけ形式」の卒業式は、あくまでも過渡的なものであった。したがって『螢の光』をうたったり、職員が『母こそは命のいずみ』という歌をうたったりして、古いものへの郷愁を持っているおとなにも共感を起こさせるようにした。／また、はじめのうちは、卒業証書をもらいに出るとき、大ぜいの子どもが一行にならんで校長のところへいき、そこでひとりずつ卒業証書を受けるようにした。これは、まだ子どもたちがなれていなかったし、一人ひとりが、広い空間をひとりでうめるほど充実もしていなかったもので、そうしたのだった。／しかしこれも、子どもたちが充実するにしたがって、だんだんと一人ひとりの間隔をおいて出すようになった。とくに第一期の最後の卒業式であった昭和三十三年三月のときは、ひとりずつ自分の席から出ていき、その子どもが帰ってきてから次の子どもが出ていくようになった。／この年は、島小写真集『未来誕生』に、六年生および卒業生として写っている「海東学級」の子どもたちが卒業したのだった。私が赴任してから六年目が終わったときで、島小としては完璧一つの典型をつくり出したときだった。したがって、一人ひとりの子どもが、みごとな充実と美しさを持っており、自分の席から立ち、前へ歩いていき、卒業証書を受けて自席にもどってくるまでの一人ひとりの子どもが、完全に空間をうずめ、全体を支配し、全体の中心に立っているひとりの人間の美しさをみせているのだった。／したがって、この昭和三十三年三月の卒業式は、すでにたんなる形式的な「呼びかけ」だけの卒業式ではなかった。そこには子どもの高い実質があり、子どもの高い実質から出るドラマがあるのだった。卒業式のときにも、そのあとの謝恩会のときにも、子どもたちが泣きふしていたのも、そういう実質から出たものだった。*

(下線一筆者)

卒業式などの行事は、今日ではその取り組みにあたって、厳粛さや荘厳さが求められることが多い。たとえば、平成10(1998)年に改訂された文部省「小学校学習指導要領」では、特別活動の内容の四番目に学校行事を説明し、そのなかで卒業式や入学式に該当する部分は、以下のように記述されている。学習指導要領では、教育的行為の対象となる学年や校種、発達段階の相違で本文に使用する言葉をかえることが多いが、この箇所に関する限り、小学校から高等学校まですべて同じ言葉でその内容が記述されている。

- (1) 儀式的行事／学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行うこと。*

このことの反映かどうかは別として、管見の限りにおいて、卒業式や入学式の形式は、ほぼ一律であり、特に卒業式は一般的にいて、特にその取り組みにあたって厳粛さを求めるものになっている。

筆者は、島小よりかなり後の時代になるが、1970年代の後半に東京において小学校と中学校の卒業式を経験したが、その卒業式においては呼びかけや児童や生徒の描いた絵画作品を掲示するということはあっても、基本的には学習指導要領がいうように儀式的なものであった。呼びかけや合唱など児童や生徒が身体表現活動に徐々にではあるが取り組みはじめていたけれども、こうした機会に児童や生徒の表現活動を意識的に仕組んで公開するというものではなかった。

その後、1980年代の後半に宮城県において中学校の卒業式運営を経験しているが、この場合においては、70年代の東京よりもその取り組みの全てにおいて旧来の儀式的雰囲気が強かった。

ことの是非を別にして、管見の限りにおいて、今日における学校行事に関する教育実践の実態と島小の学校行事との間には、そうとうに深い溝があると考えられる。

2. 何をよいとするか

1) 教育評価における指標としての“美しさ”

斎藤は、先の資料の中で「みごとな充実と美しさ」や「子どもの高い実質」という言葉を使用している。この言葉は、斎藤によって対象となる児童の心身の状態についての評言として使われている。斎藤のこうした言葉の使い方が、これまでの斎藤や島小に向けられた批判のいくつかを生じさせてきた。

「充実」や「美しさ」「実質」というものは、対象を見るものが個人として感覚的に把握するものである。これらは科学的に把握することが難しく、したがって当事者から第三者へと分かち伝えにくいものである。いわば、客観性の低い、情緒的傾向の強い概念である。

斎藤は、表現の上で「充実」などの評価指標語を用いている。したがって、このことを論理的に説明したり、理解したり、第三者に伝えたりすること自体が困難である。

島小の教師たちが学校を公開し、児童の姿を公開した背景には、教育実践の成果を認識するには、何より、児童の姿を実際に“見る”ことが必要であると考えていたということがある。

したがって、島小においては、斎藤赴任当初から積極的に授業や学校行事を公開していたし、参観者が増えるにしたがって、学校公開の日を決めて行うようになっていった。

むろん教育実践の成果を言葉によって説明することは、可能である。事実、島小では、文章化した教育実践記録を大量に残しており、そのことを斎藤自身が教師たちの力量形成や自己解放にとって大事なことであると考えていた。

しかし、上述の通り、感覚的にとらえられる児童の姿を描写するためには、これまで教育の世界で使われてきた言葉だけでは説明することが難しい。そのため、文学や演劇、美術などの世界で使用される概念を援用しなければならなかったし、積極的にそうした他領域の概念使用に挑戦したと考えられる。

学校を公開するということは、そうとうな困難がともなう仕事である。

今日において、教育学部や教育大学の附属小学校がひとつの社会的義務として行なう学校公開や研究校の指定を受け、その成果を公表するために行なう学校公開などは別にして、学校が教師たちの力量を高めていったり、児童の学力をより向上させていくことを目的として、独自に学校の教育実践を公開し、そのことによって教師たちが日常の仕事を点検し、改善し、さらに創造的に学校づくりを展開していくということは稀である。

そうした困難さをあえて引き受けて、学校を公開し続けたのが島小学校である。

島小にとっては児童の姿を学校の外に向かって「公開」することに、教育運動としての教育実践を検証していくひとつの価値、もしくは教育自体の意味があったといえる。

ここで斎藤がいう「充実」や「実質」「美しさ」という言葉を学校教育の世界に持ち込み、さらに、学校を公開することによって教育実践研究を実証的に行なったことと、その言葉自体が科学的に分析が難しい情緒的、主観的なものであったこととは、相容れないどころか、まったく同一の地平線上に存在していた。言葉ではとらえきれないような実質を持つ児童の姿をあえて言葉として表現してみるということに挑戦し、そのことを教育研究の俎上にのせようと模索したのである。そして、そのことが島小における教育実践に対する無理解や偏見、誤解などを生じさせた一因であった。

島小に関する最初の写真資料となる写真集『未来誕生』の巻末で、撮影を担当した写真家の川島浩(1925-2003)は、島小の児童について発言している。

川島は、昭和33(1958)年3月に島小の教師たちが共同で執筆し、麥書房から刊行した実践記録『未来につながる学力』の箱や扉に使用する写真を撮影するために30代の前半の時に島小を訪ね、その後、斎藤喜博の仕事をカメラのファインダーを通してずっとみてきた写真家である。

川島は、同書のなかで子どもがよりよく生きようとする状態が生じるのは、そこに、張りつめたような集中やそのあとに訪れる高次の解放感があるからであると述べている。

ここでいう高次の解放感とは、林竹二の言葉で言えば、カタルシスである*¹³。時代は後になるけれども、林が斎藤喜博との出会いを経、やがて彼と決別していく過程で「集中」と「解放」ということに言及していることが大変興味深い。

『未来誕生』の後書きのなかで川島は次のようにいう。

初めてこの学校に行った時、校長の斎藤喜博さんから、古ぼけた職員室の大きな四角い火鉢のはたで、六年の女生徒たちに紹介された。その女の子たちと話していてすぐ感じたことは、今までみてきた多くの子どもたちとは質のちがった明るさ、人なつこさ、おそれ気のなさ、礼儀正しさであった。／何か堂々とした感じだった。／それは、斎藤さんにもいえることであったが、およそ校長らしからぬ粗末な、すりきれた服を着て、子どもたちにむけるまなざしには底しれぬ愛情がこめられていた。／“未来につながる学力”(斎藤喜博編・麥書房刊)のカバーと口絵の写真を撮るために、そのあと何回か島小学校に通っているうち、ある時、例の六年生の教室

で、ビーンと張った“糸”を見た。／それは、社会科の時間で、新中国のことが話しあわれていたのだったが、その時の教師と、一人ひとりの子どもたちとの間が、眼には見えない、張りつめた糸でしっかりと結びあわされているようであった。／授業が、白熱していたのだ。／おこったような真剣な教師の顔、瞳を輝かして聞いている子どもたちの顔、顔、顔を、私はこの上もなく美しいものだと思った。／その時から私は、その“糸”にとりつかれてしまったようである。／何とかしてその、眼に見えない“何か”を撮りたい一心で、その後もずっと、毎月のように島小にかよった。／島小の人たちは、私を他人あつかいしないでいつも同じ仲間としてあつかってくれた。／自らを解放した人々の集団がかもし出す、気持ちのいい空気を呼吸したくて、私は島小に行くのが楽しみでさえあった。／ある時は大ごたつを囲んで少しばかり焼酎を飲みあったり、コーラスの仲間に加ったり、一緒にいろいろな討論をしあったりした。斎藤さんとは、撮影上の意見があわず、大激論になってしまい“お前なんかもう来るな”といわれたりしたこともあったけれど、私は行くたびに島小の空気から養分を吸って成長していくようであった…（略）…（下線—筆者）

ここで川島が記録した子どもは、1957（昭和32）年頃に最上級生となった島小児童である。斎藤喜博が島小に着任した年、1952（昭和27）年入学の児童であると推察される児童である。

これは海東照子が3年生の後半から卒業まで持ち上がりで受け持った学級のことであり、後に島小の典型といわれることになる学級のひとつであった。

この資料の中で川島が指摘しているように、海東学級の児童は集中力に満ちあふれ、子どもと子どもとが組織され、真剣に学習に取り組んでいた。

その後、1959（昭和34）年12月には、川島浩写真展「未来誕生」が東京数寄屋橋において開催されている*¹⁴。そのことから推察すれば、写真集『未来誕生』の写真は、1957（昭和32）年から約3年間にわたる期間おける島小児童の実態を写しとっているとみてよい。この中には、59頁から74頁にわたって21葉の写真があり、そこには、学校行事における児童の姿が活写されている。

この写真を見る限り、ここに現われている充実した児童の姿は、命令や強制によって生み出されたというより、むしろ、その反対に命令や強制などをいっさい排除したところできっと子ども達の心をひらき、明るく快活に振る舞うように促したことによって生みだされた。

写真に映し出された児童たちの表情に無理がなく、動きや姿勢にわざとらしさや力みがない。

勉強の中で知識や技能を向上させ、さらに自主的に学習に取り組むように児童の実質が向上してくるにしたがって、島小の教師たちは、さらに教材解釈や教材開発、子どもの思考や発想などを理解するための勉強などをする必要がでてきたと述懐しているということが、これらの写真から首肯できる。

この後、近代映画社によって島小を舞台にしたドキュメンタリ映画『芽をふく子ども』が新藤兼

人監督のメガホンのもと制作され、公開された*¹⁵。この映像は、斎藤が離任する前年の春、1962（昭和37）年4月から一年間にわたる島小教育実践の状況が撮影されたものである。

この映画の最終場面に、卒業式のシーンが登場する。このなかで卒業していく児童たちの様子が活写されており、ここにおいても、児童の充実した誇り高い表情が見られる。

映画のエンディングでは、卒業した児童が花束や卒業証書を手に持ち、学校のそばを流れている利根川河畔を歩いていくシーンとなる。卒業生の担任であった赤坂里子は、6年間の持ち上がりでこの学級を受け持っていた。ラストシーンでは、赤坂が卒業する児童たちを見送って、手を振る姿があり、その中を帰途につく児童たちの表情は、実にすがすがしいものである。

卒業式の場面では、卒業する六年生の女子児童たちが泣き崩れてしまった。式のプログラムが進み、卒業生全員が在校生の歌声にこたえて「一つのこと」を合唱する場面となった。曲の途中から男子と女子とがそれぞれのパートに別れて歌うことになるが、女子児童は先ほどから泣き崩れたままである。そこでとっさに男子児童たちは、合唱の途中で女子のパート部分である「ほー、ほー…」というところまで裏声を出してうたってしまい、とうとうその曲を最後まで高らかに歌い終えたのである。

帰途につく児童たちは、6年間にわたる島小での学校生活を総まとめする卒業式を経験し、その後、豊かな安堵感に浸り、非常に晴れ晴れとした表情となった。特に、「一つのこと」の合唱の際に女子パートの分までとっさに歌い上げてしまった男子児童は、ほっとした和やかな表情となっている。

2) 児童の内面的な充実と表現

斎藤赴任から6年目の年、1957（昭和32）年に川島浩がみた島小児童は、先述の通り写真集のなかにいきいきと写し出されている。筆者が見る限りにおいて、ここに登場する児童たちの姿はどれもすっきりとしており、清楚である。その姿には、心の内側に非常に充実したものを秘めているように見える。

教師たちから一方的に出された命令や強制によっては、決して成立し得ない美しさというものがある。そこに見られる。

島小の児童たちは、きらびやかな衣装や派手な化粧、特殊な照明などによって飾り立ててはいない。ごく普通の昭和30年代前半に見られた小学生の身体や表情のうえに充実した内容が見える。

先行研究では、斎藤喜博は、子どもの上に美を実現しようとしたという。それが斎藤の独自性であり、また、同時に理解されにくかったところであるという。

そして同時に、この問題をとく鍵が「集中」という概念であるという*¹⁶。

島小の児童たちは、学校での授業や学校行事などの中で自分たちが行なう勉強に満足し、さらに追究したいと感じていた。このように勉強によってさらに深く追究したいと思うということは、今日の言葉で言えば、関心や意欲、態度が十二分に高まった状態である。

筆者の見る限り、今日の学校教育において、関心や意欲、態度などの人間の意識における構えに関わるような情意的な側面は、知識や技能の習得とは別のところで評価されるきらいがある。たとえば、「態度が悪い」というような評価言（叱責）は、しばしば「勉強にのぞむ姿勢」として教師の側から発せられる際に道徳的に翻訳される。この際教師はしばしば無意識のうちに自分の発する言葉の裏側に目上のものに対する尊敬という価値をひそませる。したがって、このような場合には、児童の態度がよいものだとされる背景に指導者側の課題があるとはとらえられなくなる。指導や教材に欠陥があっても、それは不問に付され、教師が自己の指導のあり方を見直す貴重な機会を逃してしまうことになる。

情意的な側面を知識や技能の習得と別に考える教育評価論のもとでは、評価の結果が児童や生徒側の気構えや心持ちの問題に解消され、教師の指導を見直すことにつながりにくくなる。これでは児童や生徒にとっては、「勉強」とは無関係に“態度が悪い”と注意されるわけであり、また、勉強がわからなくとも、児童は学習活動の中で黙って教師のことを聞いていればよい、表面的に真面目さを装っておればよいということになりかねない。

「態度が悪い」と一般的に言われる状態になるからには、どこかに何らかの問題があるということである。

筆者が訪ねた学校で同行したベテラン教師が行なった算数の授業中、次のようなことがあった。教室では菱形を学習する導入の場面の授業が行なわれており、子どもたちは四角形の中の特別な形としての菱形をつくり出すべく、平行四辺形の辺を一つだけ変更して、いくつもの四角形をつくっていた。

教室の一番後ろに腰掛けた少し背の高い男の子は、授業の最初から椅子の上にのぼり、椅子の背もたれの所に腰掛けて、その教師の話に関心を持っているようであるが、その児童の行為が教室の脇で見守っているその学級を受け持っている教師には非常に気になるようであった。

授業者である教師は、その子がうれしさのあまり興奮してしまって椅子の上にのぼってしまったことが分かり、その子が自分から下りようにならなければと授業の後で発言した。実際に、授業では、いくつもの四角形をつくる作業の中でその子の活躍の場面が生まれ、自然と椅子の上にのぼるようなことがなくなっていった。

この場合、授業者は、この児童の行為を頭ごなしに注意をするということをしなかった。それは、この子が一所懸命に授業に参加しようとするあまりに力があふれて、ついつい無意識のうちに椅子の上にのぼったことがこの教師にはわかったからである。

人間というものは、嬉しくなるとふとした拍子に思いもかけない行為をしてしまうものである。まして小学校低学年の子どもであれば、そのようなことはしばしばおこるのだとこの教師がとらえていたということである。

これが仮に児童の実質とは無関係に叱責するということで一時的にその子が椅子から降りたとし

ても、その子が夢中になっていた、本当の意味での“態度”は一般的な生活規範に絡め取られてしまい、教師や旧友から疎んじられることになる。

今日の到達度評価論では、知識や技能に十分に習熟した状況において、よりよい態度やさらに勉強したいという意欲、もっと知りたいという関心が生じると考えている。したがって、態度や関心、意欲などに受け持ちの教師によって負の評価が下されるということは、知識や技能などの習熟に問題が生じていると判断することになる。教師の指導はどうであったのか、児童や生徒の集団的な思考は適切に導かれていたのか、教材は児童の発達を促す上で適切であったかということが情意的な側面における教育評価のもとで問題となるわけである。

もともとこの子にはやる気がないとか、生まれつき根性が悪いとか、そういうように教師が本来は教師自身の課題とすべきことを児童や生徒の問題として突き放してしまえば、教師が自己の指導内容や方法を改善する指標として、教育評価を利用することができなくなる。

それに対して、斎藤在職中の島小においては、児童の認識や表現の実質や内面が充実したことによって、今日の言葉でいうところの「関心・意欲・態度」が向上すると考えていた。逆に言えば、「関心・意欲・態度」がよくなければ、教師は授業や日常の学級づくりなどの自己の指導性について問い直すこととなった。

筆者は現在の到達度評価論をさきどりし、実践的に追究したのが島小のひとつの仕事であると考えている。

ここでみるように、斎藤や島小の教師たちは、知識や技能が充実し、発展した状態を「実質」や「充実」「美しさ」というような、これまで教育の世界では使用されなかった言葉で表現した。知識や技能などが一番身についていくような集中した状態をつくりだし、そのなかで適切な学習課題が提出されることによって、児童の中に追究が生まれ、児童の姿の上に美が実現すると島小では考えられていた。

3) 島小本校と分校との関係

斎藤の島小実践時期区分による第一期(1952-55年)では、先述の通り児童や保護者の実態に対応するかたちで、教師たちは行事の形式や内容をつくりあげていた。昭和28(1953)年3月からは、卒業式は本校と分校の合同で行なわれるようになった^{*17}。

島小は、当時利根川をはさんで東側の分校と西側の本校とに校舎が別れていた。群馬県境町の中心部に近い東側が分校であり、反対に埼玉県側のJR高崎線本庄駅に近い西側に本校があった。現在では、分校は廃校となり、本校のみがもともとあった場所に改築され、存在している。

斎藤が島小に赴任する以前(1952年3月まで)のかつての島小では、分校と本校とは、事務連絡以外ではほとんど教師や児童の交流がなかった^{*18}。斎藤は、島小に赴任した後は、教師の会議や研修活動など、その他の活動と同様に、行事の取り組みについては、本校と分校とが共同してすす

めていた。

学校行事における本校と分校の関係について、斎藤は『島小物語』の中で次のようにいう。

島小の先生たちは、よく河原の道を歩いた。本校と分校との間に利根川が流れており、そこには渡し舟があるが、その間をよくみんなして往復した。研究会や、授業研究会や、職員会の会場が、本校分校相互に行なわれるからだった。また、運動会とか、体操会とか、音楽会とかの行事のときは、両方の先生がいっしょになって仕事をやるので、そんなときもいききしたし、子どもたちも、さまざまな会でいったりきたりしたからだった。^{*19}

先行研究者によれば、島小の教師たちは、西側の本庄市側、東側の境町側とそれぞれに住居が散らばっていた。そして、教師たちは、斎藤赴任後においては、本校から分校、もしくはその逆に分校から本校へと、職場全体の話し合いで校務分掌を決めていたので職場が変わることがあった。自宅から学校までの通勤距離が校務分掌の変更で遠くなっても、教師たちは納得してそれに応じ、こうした変動は生じていたのであり、そのため、分校側に居住する教師が本校に勤務することになると、朝は分校まで来たのちに、渡し舟に乗って利根川を渡り、本校へと出勤した。その反対に、本庄市側に居住する教師が分校勤務になれば、朝一番に本校に来て、そこから渡し舟に乗って利根川を渡ったのである。したがって、本校と分校のどちらの教師たちも、朝晩には両方の教師たちと顔を合わせることになる^{*20}。斎藤自身は、本庄駅を経由し、バスで本校に来る場合と、境町駅を経由し、分校に来る場合、さらには自転車で自宅の玉村から本校、分校のそれぞれに通勤する場合があったが、いずれの場合においても、本校と分校の両方に顔を出すのが常であった^{*21}。これ以外にも、授業研究や会議などは、上記の資料の通り本校の教師と分校の教師とがお互いに行き来していたのであり、そうした交流をとおして、校長である斎藤喜博は、島小本校と分校の両方がお互いに力を合わせて発展していけるよう心を砕いたのである^{*22}。

同様に、斎藤は赴任した当初（1952年）から授業や学校行事等において本校と分校とが同じ歩みで展開していくように仕組んでいた。そのことが卒業式の内容やその取り組みの実態に反映していた。

3. 卒業式の創造

1) 卒業式と子どもの表現活動

昭和29（1954）年、斎藤赴任から3年目の年には、「卒業式もこの年（昭和29（1954）年一筆者）はじめて呼びかけ形式のなかに、合唱などをとり入れた新しい形式のものにした。志賀さん（武田常夫一筆者）作曲の「卒業を祝う母親の歌」もこのときにつくられた」^{*23}というように変容する。この頃から徐々にその後の島小にみられるような児童の表現を中心とする卒業式が創造された。島小の教師たちは、一年間の教育実践の成果として児童の姿を示し、児童が表現することで日

頃の勉強の成果を発表する機会となるように卒業式を創り上げていった。

筆者の見る限りにおいて、日常に行なわれる授業に限らず、学校行事の内容や方法を毎年みなおして、児童や生徒の実態に合わせてそれらを創造していくということは、一般的にいて非常に難しい。

学校には、毎年行なわれる行事が多い。毎年行なわれるとなれば、それが伝統となる。同じ教師が数年にわたって行事を運営すれば、同じ内容や方法が繰り返されることになるし、人事異動や校務分掌の変更で過去の取り組みについてわからない教師がそうした行事を担当すれば、前年度の取り組みを参考にして計画がつけられる。そうすると、児童や生徒が変わっても、同じ内容を同じ形式でとりおこなうということになりやすい。

また、一度方法を定式化したものを捨て去って、新たな内容や方法を生み出すということに学校自体が慣れていないということがある。例えば、筆者が1980年代の後半に勤務した学校では、教科用図書の版が改まったり、改訂されたりすると、指導計画を書き直す作業に夏休み中忙殺された。それは、秋に予定されていた指導主事の要請訪問の際に指導計画が点検されるからであり、ある意味で、やむを得ず教科書会社が例として示した年間指導計画を参考に、ほぼそれと同じ内容で計画を書かされるという雰囲気であり、こうしたことがあると、計画を一から作り直すということが億劫になる。だいたいの内容を決めておいて、実行しながらプランを練りなおすというようになれば、そうでもないのであるが、実態は年度の途中であっても、細密な年間計画を出すようにもとめられる。

また、計画、実行、反省という流れが大事にされるあまり、中でも一番作成に手間がかかる計画づくりを厭う空気が学校内につくられる。教科目ごとの授業はもちろんのこと、教科外の活動などにあっても、事前に細密な計画案を提起し、全職員の下承を得る必要があるから、計画の変更や創造は、できればさけたいと思うようになる。

計画はむろん大事である。計画性がないと何事もマンネリ化するが、しかし、計画から柔軟性がなくなれば、児童や生徒の実態とはかけ離れた形式化した取り組みになりやすいという問題がある。

斎藤は、島小赴任から7年目である1958年に著わした『学校づくりの記』のなかで、学校行事の創造ということについて次のようにいう。「固定化し、型にはまった感動のない行事は、ピチピチした子どもたちに有害無益だと、いつも私は思っていた。だから行事を独創的なものにすることにいつも神経を使い、どの行事のときも全職員で骨を折り工夫をした。校舎内とか講堂とか庭とかも、行事ごとに一変して、その行事の雰囲気になるようにと、かざりつけなどもみんなして工夫した。／行事はそのつどかえられるから、同一のものを幾年もやるということはない… (略) …」*²⁴

島小の教師たちにとっては、行事の主体は児童であり、児童の姿を公開する場のひとつとして、行事が位置づけられるようになった。

行事の形式は大事であるが、内容を盛りつけるのが形式であり、したがって、その内容が充実し

たものになってくれば、それに対応して形式自体を見直さなければならない。島小では、このように考えていたから、その内容である児童の実質、たとえば、認識や表現などの内容が充実してくれば、それに対応して行事自体を見直さなければならなかったのである。

これが仮に、児童の実質とは無関係に行事の形式が発想されていれば、このようなことにはならない。そういう場合には、伝統や格式を重んじて、厳粛な雰囲気の中で、清新な情趣を醸し出せばよいことになるし、それでは、その形式の中に児童ははめ込まれることになり、創造性や主体性などを児童や教師たちが発揮しなくてよくなる。

島小の場合は、単に“子どもが中心である”とスローガンや言葉を掲げておくということはしなかった。教師たちは、授業や学校行事の場で、実質的に児童を教育の主体としてとらえる教育実践を展開していた。児童の現実的な能力を出発点としながら、潜在的な可能性を引き出したり、拡大したりしていくことを、毎日実際に取り組まれる学校行事や授業の中で実現していった。

2) 卒業式の発展

次の記録は、斎藤が島小に赴任してから七年目の1957（昭和32）年度に行なわれた卒業式の様子である。受け持ちは海東照子であり、海東は、斎藤赴任から三年目の年に東京から20歳で島小に赴任し、学校の近くに住まって実質的には四年間という短い在職期間ではあったものの、島小における最初の典型と呼ばれた学級をつくりあげた。先述の通り、写真家の川島浩が最初に出会った児童は、この学級の子どもであった。

海東は、1954年の12月から本校の三年生を持ち上がりで卒業まで受け持った。この海東学級の児童の心が次第にひらかれていくのにしたがって、卒業式では児童の作品を展示したり、児童の表現の場をいれたり、少しずつ新しい内容を盛り込んでいった。この学級は、斎藤赴任の年（1952年）に入学した児童である。入学から卒業までの6年間で1952（昭和27）年4月から1962（昭和37）年3月までの斎藤在職中の島小ですごした児童は、この年から六年間卒業し続けることになる。そういう意味で、斎藤や島小の教師たちによる学校づくりの第一期生がこのとき卒業したといつてよい。斎藤喜博は、『学校づくりの記』のなかで、海東学級の児童が卒業したときのことを次のようにいう。

校庭には赤や黄色の風船が上がっている。「卒業生おめでとう」の紙も下がっている。講堂にも赤や青や黄色のゴム風船が下がっている。テープもいっぱい張ってあり、正面の壁には白い布が張られ、それに子どもたちのつくった金銀の大きな牛や豚や馬の切りぬきがつけてある。その両わきに張られた幕にも、子どもたちの絵の切りぬきがピンでとめられてある。講堂の両側も後ろのほうも、造花やテープや子どもの作品でかざりつけがしてある…（略）…座席は正面に向かってU字形に作られてある。在校生は正面に向かって中央に腰かけ、卒業生のお母さんたち全員は側面に、来賓もお母さんたちに向かい合った側面の正面寄りの席にいる…（略）

…ピアノによって「お手々つないで」だの「春が来た」だの、入学当時を思い出す曲が弾かれる。すると卒業生が正面にある出入口から、その曲に合わせて一列になってひとりずつ入場してくる。割れるような拍手で迎えられ、拍手は全員が席につききるまで続く。…(略)…卒業生が着席し終わると、ピアノと拍手がやみ、ひとりの女の先生が「さあこれから卒業式をはじめましょう」という。一同拍手でそれにこたえる。拍手のなかを大きな花たばを持った五年生のふたりの子どもを先頭に、十人ばかりの在校生が前へ出ていき、卒業生に送る詩を呼びかけふうに朗読する。朗読が終わるとまた拍手のなかを花たばを卒業生に贈呈する。／花たばの贈呈が終わると卒業証書の授与になる。校長がテーブルの所にいくと、教務主任が卒業生の名を呼び上げる。卒業生は一人ひとり立って校長の所へくる。卒業証書は、一つ一つが、みな巻いて、赤と白のテープでしばってあるので、校長はそれを「××ちゃん」とか「おめでとう」とかいいたながら片手で渡す。卒業生も片手で受け取って、きれいな歩き方で帰っていく。卒業生が一人ひとり証書をもっている間、ピアノで、しずかに「早春賦」が弾かれている。そのピアノの音に合わせて、卒業証書を受け取り、拍手をあびながらつぎつぎと自席に帰っていく子どもたちをみるお母さんたちは、皆涙ぐんでいる。／証書の授与が終わると、校長の話が五分ぐらいある。卒業生は皆涙を流してしまう。…(略)…ピアノが終わると在校生と卒業生で「おめでとう」「ありがとう」の呼びかけが続き、ついで卒業生だけの呼びかけになる。先生方、来賓、母親、在校生への謝辞もそのなかにはいっている。／ピアノで「楽しき農夫」が弾かれる。卒業生と在校生と先生たちとの間に、思い出の呼びかけがはじまる。旅行のこともある。運動会のこともある。野外劇のこともある。フォークダンスのこともある。家庭科でつくった「河原シャツ」(海東照子学級がつくったもの。1952(昭和27)年入学。海東はこの学級を三年生の途中から持ち上がりで卒業まで受け持った一筆者)のこともある。音楽会のことから「あのときの歌をいっしょに歌おうか」「うん、歌おう」で、この学校で作った劇のなかで歌う「草刈りの歌」を、／一 みんな行こうよ 草刈りだ／誰がはやいか 刈りくらべ…(略)…と元気よく歌い出す。／また呼びかけで「小さい子に算数を教えたときがあったっけ」で、三年生が「芳夫さん、この問題を教えてください」と卒業生のほうへ出ていく。…(略)…そこで泉(船戸咲子一筆者)さん作詞、川尻(1954年12月作成、井上光正作曲、島小研究報告10, 51頁に船戸咲子作詞として掲載、作品ができる経緯もある。一筆者)さん作曲の「みんないっしょに」が合唱される。その歌はつぎのような歌で、泉さんの学級で助け合いができなかったときにつくられたものだった。／一 問題出しっこしているときに／どうしてもここがわからない／こんな友だちがいたときは／みんなでいっしょに考えよう…(略)…ピアノで「別れの曲」が弾かれる。在校生と卒業生の間にお別れの挨拶が創作舞踊や呼びかけで行なわれる。その呼びかけから、森田(赤坂里子、昭和30年3月〈島小研究報告10, 19頁には、1954年3月となっている〉作曲、島小研究報告10, 2頁参照。一筆者)さん作曲、児童共同作詞の「六年生を送る歌」が在校生全員によって歌われる。／一 あっちの道こっちの道を／歩

きながら／話してくれた六年生／もう中学へ かようのだ…（略）…この歌が終わるとお母さんたちも「私たちも歌いましょう」といて、志賀（武田常夫—筆者）さん作曲、お母さんたち共同作詞の「卒業を祝う母の歌」を合唱する。／一 かわいい肩にランドセルしょって／一年生になってから／みんな一しょに六年たった／そうして今日は卒業だ…（略）…ここに書いた卒業式の様子は、数年前（1957年度—筆者）のものだが、その前日、六年生は全員で教室や職員室や図書室や、一年生の教室を手分けで大掃除していた。「最後のお掃除だから、うんときれいにしていこうね」「もう小学校の掃除はこれきりでできないんだね」こんなことをいいながら、男の子も女の子も、いつまでも残り惜しそうに床を何度もみがいたり、机の上をていねいにふいたりしていた…（略）…^{*25}（下線—筆者）

武田常夫や赤坂里子など島小の教師たちはここに見られるように島小の児童が歌う曲や詞、シナリオなどを創作し、教材化している。それは、児童たちが実感を込めて歌ったり、身体を動かしたりするためにふさわしい作品が必要だったからである。

児童の学力や実質が向上するにしたがって、さらにその子たちの力を伸ばしていくために新しい教材が必要となる。

この後、さらに島小では専門家の力を借りながら歌唱表現や行進、野外劇などに取り組むことになるが、それは島小の教師たちだけの力では対応できないほど、島小児童の力が伸びていたからである^{*26}。

卒業式の内容は、卒業する児童をたたえ、卒業生へのはなむけになるように工夫されるようになった。一般的に言えば、入学式や卒業式は、式次第こそつくられはしても、その式は、校長や教頭など校務運営の中心になる人物によって企画されることが多く、それらは儀式的な内容であり、式における進行の細部にまで教職員の手によってシナリオ化され、職場における検討を経るということは稀である。斎藤が島小に赴任した当時は、授業案（学習指導案）が検閲的な意味合いで形式的に作成されていたことによって、教師たちを抑圧していたことから、それをやめたのであるが、その一方で、前年通りに実施され、マンネリ化していた行事においては、事前にそのシナリオを作成し、職場でそれを検討することによって、創造的にその内容が展開し、児童の学習活動の一つとなるよう、式の結果、達成感や成就感を子どもたちが味わえるよう教師たちは心を砕いていたのである。

3) 学習的経験を総括する卒業式

斎藤が前にあげた資料の中に記録しているように、卒業式の内容は、卒業する児童が、斎藤が赴任した以降の島小において経験した六年間の小学校生活の中で授業や学校行事などの学習活動の成果を色濃く反映したものになっていた。

海東学級では、子どもの自主的な活動が元となって子ども会が創造された。また、食べることが

家族から禁止されていた桑の実をあえて教材として家庭科の授業に取り上げ、「どどめじゃむ（桑のみのジャム）」づくりが行なわれた。夏の暖かい季節には、「河原シャツ」が作製された。このシャツは、海東学級の子たちが利根川で遊ぶときに着られるように、当時はまだ珍しかったTシャツに近いものを海東が工夫し、教材開発したものである。学級の子たちがサラダを食べたことがないと知ると、海東は「島村サラダ」を教材化した。

卒業式の中身は、そうした教育実践の経過、いわば海東学級のカリキュラムが反映したシナリオとなっており、それが児童の実感を込めた表現を通して式の中で展開したのである*²⁷。

卒業式は、その後全校の児童が一年間に学習してきた内容を学校の内外に公開し、その成果を式に参加した児童や教職員、参観者などによって確かめあう機会として変容していった。斎藤は、『学校づくりの記』のなかで、次のようにいう。

卒業式のすじは、だいたいこういう形（上記の資料一筆者）で行なわれるが、内容は年々かわっていった。という言葉もちがうが、「演劇の会」でやった劇のなかの一場面がはいったり、その子どもたちが前のほうへ出たり席に帰ったりする間に、二部合唱や三部合唱が歌われたり、この学校でつくった卒業生と在校生との美しい交歓舞踊がはいったりして、いつの年も卒業式という感じより音楽と演劇と舞踊の会という感じになっている。そしてそれが形式的な卒業式より、より強い感動を子どもたちや親たちにあたえている。／私たちは、いつも行事を大事にしている。だからできるだけ行事を少なくして、そのときどきに創造的な感動的な行事を創り出すために全力をあげようとしている。学校に伝わる前例をみては、十年一日のように同じ形の行事をやっていれば楽だかしのないが、それは、子どもたちに惰性で形式的に行動することを教え、そのものに直接感動するのではなく、「仰げば尊しわが師の恩」という悲しそうなメロディーから、習慣的にかなしみをさそい出されるだけの、一般的な概念的な子どもをつくってしまうのだと思っている。ほんとうの意味の感動は、それによって自分の意識を変革されるものだが、私たちは創造的な行事面によって、そういう感動を子どもたちにうえつけたい。そうでなければ行事など意味がない。こんなに先生たちが骨を折り、時間をかけて、行事のやり方を工夫する意味はない。*²⁸

斎藤が赴任した1952（昭和27）年当時の島小では、『『螢の光』をうたったり、職員が『母こそは命のいずみ』という歌をうたったりして、古いものへの郷愁を持っているおとなにも共感を起こさせるようにし」、また、「はじめのうちは、卒業証書をもらいに出るとき、大ぜいの子どもが一列にならんで校長のところへいき、そこでひとりずつ卒業証書を受けるようにした。これは、まだ子どもたちがなれていなかったし、一人ひとりが、広い空間をひとりであらめるほど充実もしていなかった。ので、そうした」*²⁹のであった。つまり、あくまでも島小の実践は、児童の実質に対応してつく

られたということである。島小で使用された子どもの実質という言葉は、学力であり、ものの見方であり、ものごとの処し方である。そうした実質を充実させたり、発展させたりしていくことが教師の仕事であると島小では考えていた。

授業についての取り組みと同じように、学校行事においては、形だけになってしまったり、通俗になったものを取り除き、ものごとの本質をリアルに見つめるような、児童の実感にあふれた表現を主体とする内容がつけられていった。

4. 入学式の展開

1) 入学式の創造—保育園とのつながり

入学式に関して、斎藤が島小に赴任した当初の1952（昭和27）年から1955（昭和30）年頃までは、その取り組みが具体的にどのような内容であったか現在までのところ未詳である。これまで述べてきた卒業式の場合から想像してみると、1954（昭和29）年、斎藤赴任から3年目の頃までは、斎藤が島小に着任する以前の状況を踏襲した入学式の内容になっていたと思われる。

記録の上では、金子緯一郎が執筆した『島小十一年史』の「昭和31年度」の年譜に次のような記載がある。「入学式（9日）／1年生といっしょに呼びかけをしたり、歌ったりおどったりする新しい入学式のやり方を、この年から考え出す」*³⁰。この年の入学式の記録が後述の『学校づくりの記』と「島小研究報告」にあり、この年から年度の初めであるが、それでも入学したばかりの新入生に対して、小学校に登校する最初の日から、表現する喜びや上級生と交流することの楽しさを味わわせようとするようになったと考えられる。

この後、認識的な活動と同時に表現に関わる活動を大事にする教育活動を島小において展開していくにあたって、後述するように1955（昭和30）年の第一回公開研究会をきっかけにして島村の保育園職員とのつながりが生まれ、幼児教育から学び、保育園と小学校とのつながりを島小では意識するようになっていた*³¹。

斎藤は、『学校づくりの記』のなかで、次のように入学式の状況を記録している。同書の刊行年からするとここに記録された入学式は、1956年頃であり、また、島小の教師たちが1956（昭和31）年11月頃編集、発行した謄写版刷りの「島小研究報告第14集」によると、「入学式、始業式（呼びかけ）」と題されたシナリオがあり、その内容とほぼ同様であり、この資料には、1956（昭和31）年4月9日の日付がはいっている*³²。

入学式と始業式をいっしょにして呼びかけと音楽でやった。ピアノで「春が来た」が弾かれ、それにつれてみんなが歌い出す。そのつぎに転退職の先生の紹介と挨拶、新任の先生の紹介と挨拶があり、児童の新旧の先生への挨拶の呼びかけや、新学年への気持の呼びかけなどがつぎつぎとある。それらの間に「春の小川」が歌われたり、ピアノが弾かれたりする。／そのうち

にピアノは「お手々つないで」の曲になる。一年生が向こうから、お母さんといっしょに並んではいってくる。六年生が「あ、一年生だ、迎えよう」というと、みんないっしょに「迎えよう、迎えよう」といって二列に並び、相向かいの人と手をつないでアーチをつくる。ピアノは「とおりゃんせ」になる。全校生が手拍子を打ちながらその歌を歌い出す。一年生はにこにこ笑いながら担任の先生のあとについて、そのアーチをくぐりぬけ、前の席につく。六年生ももとの場所にもどる。／そこで六年生から一年生へのお祝いの呼びかけがあり、お母さんの呼びかけがあったり、児童が共同作詞し、先生が作曲した「一年生おめでとう」というつぎの歌が歌われたりする。／一 みんなきたね学校には／兄さんもねえさんも いっぱいいるよ／かけりっこしたり おにごっこしたり／みんなと遊ぶよ／二 ジーとベルが鳴るでしょう／そして教室へはいるのよ／みんな仲良く いっしょになって／勉強するのよ… (略) …在校生の「一年生の歌もききたいなあ」で一年生も歌ったり、その歌を全校で歌ったりもする。それらの間に校長の話もある。みんなのしい気持ちで入学式と始業式をすませて教室へはいっていく。／庭にも廊下にも講堂にも、入学を祝うかざりつけがしてあるが、新しい一年生の教室は、上級生の心をこめたかざりつけで、花のような美しさだ。^{*33} (下線—筆者)

この入学式は、斎藤喜博が島小に赴任して以降5回目の入学式であり、この時期には、島小児童が心をこめて新入生を迎えるというような趣となっている。一般的に言えば、入学式では、新入生は校長や来賓たちの祝辞を聞き、慎ましく腰掛けていればよいものであるが、島小においては、卒業式と同様に、新しく入学してくる子どもたちの実質に対応して、新入生自身の喜びや期待を表現するような機会をつくり、上級生たちが心から一年生を歓迎する、式の内容や展開を創造した。

2) 入学式の台本

島小においては、先述の通り、行事には台本を作り、それを元に行事の事前、事中、事後の研究をしようと考えていた。同時期に授業案の廃止を打ち出したのとは反対に、それまでは形式的に行っていた行事を児童の学習に意味があるようなものにかえていこうと努力している。

斎藤喜博は、後に授業研究において事前、事中、事後研究の必要性を実践的に明らかにし、特に事中の研究を「介入授業」と呼び習わした^{*34}のであるが、そのこととの関連を考える上で後述するように行事の事中研究は、はっきりと教師たちによって意識化されていたかどうかは別として、大変興味深い事実として特筆してよい。

入学式の台本について、斎藤は島小に在職した最後の年に著わした『教育の演出』のなかで次のようにいう。

この(入学式の一筆者)台本はもう七年も前(昭和31(1956)年頃—筆者)のものなので、いまからみると幼稚なところもある。使った歌なども一般的なものであった。だが、このときの

ものも、実際はこの台本より動きがあり、はなやかで感動的なものだった。そして島小の入学式も、こういうものから新しく出発していったのだった。／入学式は、そのあと年年新しく創造されていった。軽快な音楽に合わせて前のほうへ出ていった在校生から、お祝いのゴム風船が一人ひとりの新入生にいっせいに渡されたり、在校生の各学級の合唱や舞踊があったり、各学級の子どもから、歓迎のことばや、希望や感想が一年生に向かってこもごものべられたり、新入生の名前が呼びあげられると、一人ひとりの子どもが返事をし、一言ずつ話をしたりした…（略）…最後に、新しい一年生に、新しい学級の旗が渡される。その旗は、あとで新しい学級で図案を考え、アップリケするため、無地のままだが、さまざまな色彩のリボンがいっぱい垂れさがっているので、華やかで楽しそうに見える。その旗を渡されると、一年生としての学級が編成されたことになる。／それでそのあと一年生は、独立した一学級として母親たちからはなされ、ランドセルもおろして、全校のリズム表現に参加する。一年生は、まだそのリズム表現を教わっていないのだが、アコーディオンの曲に合わせ、上級生にときどきみちびかれながら、庭いっぱいに楽しそうにおどったりスキップをしたりしている。／それが終わると全校行進になる。新しい旗を先頭に立てた一年生学級は、島小行進曲の曲に合わせ、堂堂と行進していく上級生学級のかたわらを、少しづつ遅れながらも、ひとかたまりになってみごとに行進している…（略）…みんなならび終わると、全校合唱があり、二年生以上の子どもの、『みんな行こう』の合唱と手拍子に送られて一年生は自分たちの教室にはいっていく。テープやゴム風船できれいにかざられた、そして近所の上級生がかいた、それぞれの子どもの似顔のはってある教室へとはいっていく。^{*35}

ここに登場する「島小行進曲」は、作曲家である丸山亜季（木村八重子）が、人形座の夏季練習のために訪ねた島小分校での合宿生活をきっかけにして、斎藤と出会い、その後斎藤の要望にこたえて島小の児童のために作った曲である。「大きな石を／ぐんぐんと／みんなで押せば／動いていく…」という斎藤の作詞に丸山がアウフタクトの心地よいリズムを刻んだ曲をのせている。

行進曲というと、一般的には軍隊式の勇ましい歩調を想像するし、実際にそうした行進をしている学校を散見するが、島小では、児童による表現活動として大切にされていた^{*36}。

2002年秋に訪ねた時には、島小学校のフリースペースとなっている場所には卒業生が寄贈した木彫りのレリーフがあり、そこにはこの歌が刻み込まれていた。「大きな石」と名付けられたこの歌は、現在でも多くの学校で歌われている曲であり、当時の島小児童の実質をさらに前進させる力のある歌唱教材であった。

このように、斎藤が専門家の力を借りて教材を創り出していったのは、繰り返すようにそれだけ島小児童の判断力や行動力、認識などの実質的な力が向上し、その力をさらに引き出したり、拡大したりしていくために新しい教材が必要となったからであった。

3) 新入生の変容

島小では、初期(1952～55年)に学校が地域における学芸の拠点としての役割をしっかりとつことによって、児童をいきいきとさせ、その姿を地域に示すことによって地域の持つ封建的な空気を払拭し、変革していく教育実践を展開し^{*37}、その中で島小の学校公開を通じて保育園とのつながりを深めていった^{*38}。赤坂は、島小の教師たちが編集し、発行していた「島小研究報告」第15集に書いた「保育園と小学校とのつながり」と題する文章のなかで、次のように記録している。

…(略)…小学校の実践が進むにつれて、保育園の指導の仕方を反省する段階から、保育園自体が、それまでと違った方針を実施して行こうという積極的な動きがでて来ました。それと同時に若い保母さんが園長になり、そこに保育園の職員集団の方向が、小学校と同一の方向になったのです。小学校の参観日には、父母だけでなく、保母さんも一緒に参観し、授業の見方、子どもの見方を話し合ってきました。また保育園の母の会が時には、小学校の先生が参加して話し合ったり、或いは村のサークルに保母さんと一緒にはいったりして交流し合い、集団と集団との親密感をつくってきましたし、その実践の内容も深めてきました。保母さんたちは、小学校の庭先でやっている遊びや体操の指導をみて、その指導方法を保育園の実践の中に生かしています。このようにして、保育園と小学校とは原則的に一致しているのです。^{*39} (下線―筆者)

ここで赤坂が指摘しているように保育園自体が島小での教育実践に参加し、子どもの見方や表現活動の実際などを島小の教師たち、親たちとともに勉強し合い、その内容や方法を参考にしながら充実した保育活動を展開するようにかわっていった。

幼児教育と初等教育の連携は、これをうたう実践や研究をしばしば目にするが、実質な意味で同じ方向性の勉強を両者がともにすすめることは難しいけれども、そうしたつながりによって、島小に入学してくる新入生たちは、入学した最初の日から上級生の導きで歌を歌ったり、簡単な舞踊をやりこなした。

島小の周辺には、斎藤喜博によれば、二つの保育園があった。ひとつは、キリスト教会で作っているものであり、もうひとつは村営であった。斎藤が島小に赴任した1952(昭和27)年当初は、二つの園の園長を教会の牧師が務めていた^{*40}。その後、園長が保育園の実践を担う若手にかわり、島小の児童の実質がよくなっていくのにしたがって、保育園との連携が進むようになったと考えられる。

斎藤赴任から6度目の入学式が行なわれた1957年度に入学してきた分校児童は、赤坂里子学級となり、その後、この学級は六年間持ち上がりで斎藤が島小を離れる直前の1962(昭和37)年に卒業していくことになる。この学級は海東照子、船戸咲子につづいて島小における典型といわれた学級

であり、同時期に撮影され、公開された映画「芽を吹く子ども」（新藤兼人監督作品）のなかで中心となっている児童である。赤坂は、島小の教師たちによって編集され、1958年3月に発行された「島小研究報告」第15集の中で、持ち上がり六年間担任の最初の年度について、当時の一年生を次のように記録した。1957（昭和32）年4月に行なわれた入学式での様子である。

私達の学校の入学式は、在校生、教師、父母の「よびかけ」で新入生を迎えます。迎える人達は校庭にならんで、可愛い、一年生の歩いて来るのを待っています。一年生は男の子と女の子と手を結んで、列をつくって楽しい音楽に合わせながら、かしこまって入場してきます。入場する前に校門の外で待っていた一年生に私が、「さあ、たくさんのおにいちゃん、おねえちゃんが、みなさんを迎えてくれますよ。みんな並んで、元気に入って行きましょうね。」／すると数人の子どもが／「小さい順ですか。」／と聞きました。／「そうですよ。」／と答えると、私の指示を待たずに、男の子と女の子は手を結んでさっさと並んでしまいました。／この時、私は子どもたちの動きの早さと、「小さい順ですか。」と聞いた子どもと、その言葉を聞きとる子どもたちの、呑込みの早さと、ぴったり合った呼吸にびっくりさせられてしまいました。／式が終わって教室に入ります。下駄箱の名札は先生にみつけてもらおうと思っている子どもは一人もいません。わたしの場所はどこだろう。といているようにみんなの子も探しているのです…（略）…*41（下線—筆者）

赤坂は、斎藤が島小に赴任した翌年、1953（昭和28）年に隣の境小学校から島小に赴任し、分校二年生を四年生まで持ち上げで受け持った。その後、1955年入学の二年生を担当した。この記録は島小において赤坂がはじめて受け持った一年生の時のものである。赤坂は、後に六年間の持ち上がり記録を1967年に『島小での芽を吹く子ども』として刊行し、そこで1957（昭和32）年4月当時の入学式の様子を次のように記録している。

昭和三十二年の四月、わたしははじめて一年生を受け持った。／新しい学級の担任になる四月は、一つずつ進級する子どものように、わたしの心もはずむ。はじめて一年生の教師になるわたしは、一年生とはどういうものなのか、どんな扱いをしたらよいのかさっぱりわからない。わたしは新入生を受け持つことで、一年生に入学する子どものように、心もとないような、うれしような不安な気持ちでいっぱいになっていた。／入学式の日。小学生になったとき最初に受け持ってくれた先生として、わたしは子どもたちにできるだけよい印象をあたえたい。髪のとかし方も洋服の着方もいつもより念入りに気をくばる。／学校の玄関には「一年生おめでとう」と書いた赤い文字がくっきりと張^{（ママ）}られている。教室もきのうから六年生の子どもたちがテープや風船できれいに飾り、机は円形にならべられて、一年生を迎える用意はすっかりととのっている。わたしは何べんも職員室の窓から首を出しては、新入生のくるのを待ちかねてお

ちつかない。やがて子どもの姿が桑畑のなかの道に小さくみえはじめた。／「やあ、くるよ、くるよ」／先生たちもわたしといっしょに立ちあがって、窓から顔を出した。／ところが、毎年、子どもによりそって現われる付添の父母の姿がみえない。親たちは何をぐずぐずしているのだろうか。わたしはそんな思いで、子どもたちの動きをみていた。子どもたちは、全員保育園に集合するらしい。みんな小学校の門の前を通りすぎていってしまった。やがて子どもたちは、ちゃんと勢ぞろいして、自分たちだけでやってきた。／小学校の入学式といえば、親といっしょにやってくるのが当然のことと思っていたわたしには、この子どもたちの行動は意外だった。わたしは、そういう子どもたちに気おされるような気持ちになるとともに、次代の子どもが生まれているのだなあとも思っていた。／入学式。島小では、在校生・教師・父母の全員がコの字型にならんで新入生を迎える。一年生は六年生が両手でつくるアーチをくぐって入場する。／わたしは校門の外で式のはじまりを待っている一年生をならべようとして出ていった。わたしが近づいていくのといっしょにひとりの子どもが、「先生、小さいじゅんにならぶのですか」と聞いた。「さあ、ならびましょう」という指示を出そうとしていたわたしは、ここでも子どもに出しぬかれてびっくりした。そして、「そうですね」といった。すると、子どもたちはわたしの返事をそれぞれが聞きとって、男の子と女の子がちゃんと手を結んですっとならんでしまった。わたしはこの子どもたちの動きの早さと、子ども同士のぴったりした呼吸にびっくりしてしまった。／この日の入学式は、一年生の入場からはじまって、開会の歌が全員で歌われる。それから「一年生入学おめでとう」の呼びかけがおこる。新入生のひとりひとりの名前が呼ばれ、全校生徒に紹介される。つづいて「一年生を迎える歌」が在校生全体で合唱されたり、学級ごとに一年生を迎えることが贈られたり、上級生の合唱があったり、新入生に向かって先生たちが自己紹介したり、母親からのあいさつがあったりした。／前日、式の計画を立てるとき、ことしは一年生にも仲間入りのあいさつとして歌を歌ってもらおうという案が認められていた。それで、わたしは保母さんに、ことしは一年生にも式のなかで歌ってもらおうとしていることを話し、保育園で習った歌で、子どもがいちばん喜んで歌う歌はどれなのか教えてもらっておいた。／新入生は式のすすむにつれて、小学生になったことをつよく感じていくようだった。一年生の歌う番がきたとき、彼らはすっかり緊張してしまっていた。／「今度は一年生に歌ってもらいます」／司会の船戸さんがいう。すると、ぐりぐり頭の宏夫は、口をぽかんとあけて目をぱちぱちさせ、船戸さんのほうをみていた。いちばんからだの大きい恵美子は、はずかしそうにからだをくねらせる。／「みんなの大すきな歌、『つくしのほうや』を元気で歌ってちょうだいね」／わたしはかたくなっている子どもをときほぐそうとして、やわらかく呼びかけた。けれど、子どもたちはあまりかしこまって歌うので声がかすれていた…(略) …*42 (下線—筆者)

この資料の限りにおいて、1957（昭和32）年の頃になると、島小児童が勉強や行事の上で充実し

てくるのにしたがって、新入生自体が自立し、主体的に行動できるように変容している。そうした事実を新鮮な驚きをもって教師たちは受け止めた。

この後、さらにそうした児童の潜在的な可能性を開花させるための仕事に島小の教師たちは取り組んでいく。

ここにみられる児童の実態は、保育園と小学校との両者がお互いの教育実践上のつながりを求めたということの成果である。

そして、島小の教師たち自身が、こうした現実的な能力を向上させてきている子どもたちの実態に対応しながら、新たな教材解釈や指導法を探し求め、職場で共同し、さらに質の高い授業や学校行事を創造していくことになる。

- * 1 狩野「島小における『解放』と教育」、『鹿児島大学教育学部紀要（教育科学編）』第51巻，2000（平成12）年
- * 2 斎藤喜博『学校づくりの記』1958年，国土社。引用は、『斎藤喜博全集』11巻，78－79頁，国土社，1970年より。以下，島小文献は断わりのない限り『斎藤喜博全集』国土社からの引用であり，巻・頁数を記す。
- * 3 同前。
- * 4 川嶋環氏（元島小教師）談。2002年1月，6月，7月，11月筆者による聞き取り。
- * 5 狩野「島小の教育実践—授業づくり」、『鹿児島大学教育実践研究紀要』第12巻，2002（平成14）年
- * 6 斎藤喜博『教育の演出』1963年，明治図書出版。引用は『斎藤喜博全集』5巻，137頁，国土社，1970年
- * 7 斎藤喜博『島小物語』1964年，麥書房，引用は、『斎藤喜博全集』11巻，454－455頁。金子緯一郎編『島小十一年史』1966年，麥書房，34頁，引用は『島小研究報告第六巻』復刻版（オフセット印刷）1995年より，以下同様である。この点について2003年，滋賀大学で行なわれた日本教育方法学会において口頭報告した。
- * 8 引用は，大空社からの復刻版（オフセット印刷）を使用した。1995年。
- * 9 『教育の演出』全集5巻，46－47頁
- * 10 2001年1月，沖縄県識名小学校他。共同実践研究の一部を沖縄県民間教育研究所編，『おきなわの子どもと教育』第72号，2003年に報告した。
- * 11 『教育の演出』全集5巻，160－161頁
- * 12 文部省「小学校学習指導要領」平成10（1998）年他。
- * 13 狩野「島小における『解放』と教育」前出
- * 14 『島小物語』全集11巻，539頁（昭和三十四年十二月二日から八日まで一週間，東京有楽町スキヤ橋ショッピングセンター2階，富士フォトサロンにおいて，川島浩写真展「未来誕生」—群馬県，島小学校の教師と子どもから—がひらかれた）
- * 15 大空社から復刻された。1995（平成7）年「島小研究報告」
- * 16 横須賀薫『斎藤喜博 人と仕事』27－31頁，1997年，国土社。
- * 17 金子緯一郎編『島小十一年史』12頁，前出
- * 18 田島富佐子「固さをくずす」，昭和30年5月「この三年間で得たもの」，「島小研究報告」第四集，引用は『島小研究報告第一巻』復刻版（オフセット印刷），1995年，大空社より。
- * 19 『島小物語』全集11巻，570頁
- * 20 第3回斎藤喜博研究会2003年8月31日（宮城）
- * 21 川嶋環氏談，2002（平成14）年10月，筆者による聞き取り。

- *22 「第3回斎藤喜博研究会」(宮城)の席上,横須賀薫氏(宮城教育大学),箱石泰和氏(都留文科大),小林重章氏(同前),廣川和市氏(札幌学院大),梶山正人氏(千葉経済短大)に,ご教示頂いた。2003年8月31日。
- *23 『島小物語』全集11巻,411頁
- *24 『学校づくりの記』全集11巻,271頁
- *25 『学校づくりの記』全集11巻,281-289頁
- *26 『島小物語』454-455頁,『教育の演出』全集5巻,99-100頁など。
- *27 海東照子「針をもたない家庭科教師」,『島小研究報告第12集』1955年12月1日,後に,大空社刊行の復刻版『島小研究報告』第3巻,1995年に収録された。
- *28 『学校づくりの記』全集11巻,289頁
- *29 『教育の演出』全集5巻,160頁
- *30 『島小十一年史』40頁
- *31 赤坂里子「保育園と小学校とのつながり」,『島小研究報告』第15集,1958年3月30日,引用は復刻された『島小研究報告第三巻』1995年,大空社による。以下,同様である。
- *32 「島小研究報告」第14集,1956(昭和31)年11月1日発行。後に,大空社刊『島小研究報告』第3巻(オフセット印刷,復刻版),1955年に再録された。
- *33 『学校づくりの記』全集11巻,271-273頁。この時の式の様子は,『教育の演出』全集5巻,84-85頁に詳しい。
- *34 「介入授業」(小林重章執筆),横須賀薫編『授業研究用語辞典』1990年,教育出版,195-196頁など。
- *35 『教育の演出』全集5巻,88-89頁
- *36 『教育の演出』全集5巻,117-118頁など。
- *37 狩野「島小の教育実践—地域と学校」,『教育方法学研究』第28巻,2002年
- *38 赤坂里子「保育園と小学校とのつながり」3頁,『島小研究報告』第15集,1958年3月30日。後に『島小研究報告』第3巻,1995年大空社よりオフセット印刷にて復刻,に所収。
- *39 赤坂 前出。
- *40 斎藤『島小物語』全集11巻386-387頁
- *41 赤坂,前出,6頁
- *42 赤坂『島小での芽を吹く子ども』,17-19頁,1967年,明治図書出版

【附記】2003年9月,滋賀大学で行なわれた第39回日本教育方法学会において口頭報告した「島小の教育実践—表現活動—」の一部を当日の討論をふまえて書きあらためたものである。本論文を準備をする過程で,写真家の川島浩氏の訃報に接することとなった。川島氏は,島小の実践記録集である『未来につながる学力』の箱や各章の扉にある写真を撮影するために島小にはいり,その後島小や境小,教授学研究会の会の実践をファインダーを通じてずっとみてこられた。筆者は,何度かお目にかかり当時の状況をお聞きする機会に恵まれたし,また筆者が行なう授業に入らせていただき児童の姿を撮影していただくという経験もした。筆者は,ここ数年にわたって川嶋環氏(元島小教師),大槻志津江氏(元境小教師),梶山正人氏(元千葉経済短大教授)とともにいくつかの学校で児童の表現活動を指導する場面に立ち会う機会を得ることができた。また,西江重勝氏(沖縄県教育庁那覇教育事務所長),宮城和也氏(沖縄県普天間小学校教頭),長嶺浩也氏(同普天間小学校教諭)には,学校現場とのつながりをつくる上で物心ともにお世話になった。記して感謝申し上げる。